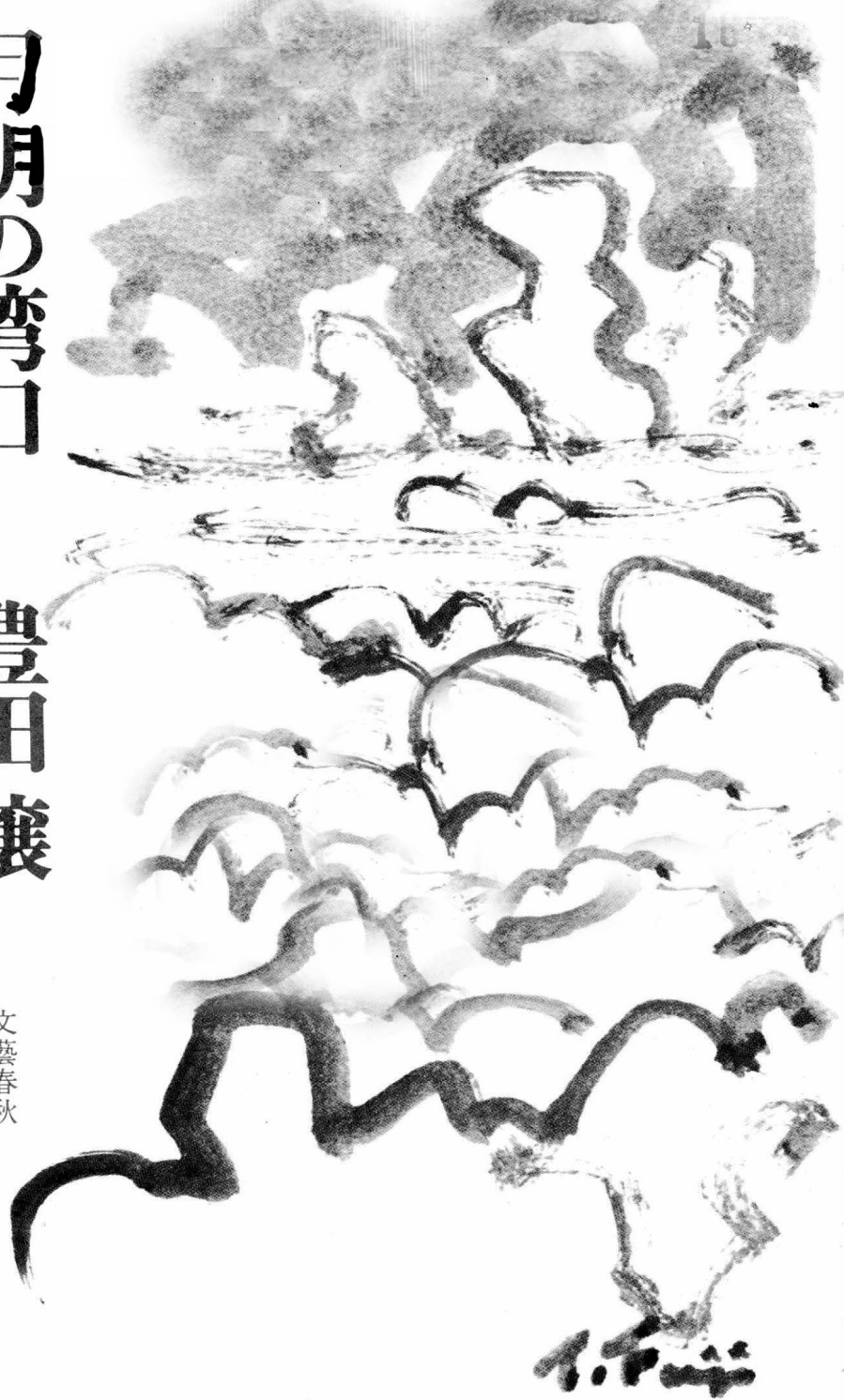




月明の湾口

豊田穰

文藝春秋



著者略歴

大正9年満州四平街生まれ。海軍兵学校卒。
海兵68期。現在、東京新聞社（中部日本新聞
兼務）勤務。昭和24年「帰還」で第1回横光
利一賞次席、26年「ニューカレドニア」「ミッ
ドウェー海戦」その他の業績で第1回岐阜県
文化賞、46年連作長篇「長良川」で第64回直
木賞受賞。

月明の湾口
昭和四十九年九月三十日第一刷

著者 豊田 穰

発行者 桒原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話東京（二六五）一二二一

郵便番号一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 加藤製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Jo Toyoda 1974

Printed in Japan

月明の湾口

月明の湾口 目次

真珠湾・その生と死……………	5
マダガスカルの月明……………	49
シドニーの岸壁……………	153
特殊潜航艇と私……………	217
——あとがきにかえて——	

A・D 装画 藤本東一良
竹内和重

真珠湾・その生と死

一

昭和四十六年、九月初旬、私は広島県江田島の母校を訪れた。

私が海軍兵学校を卒業したのは、昭和十五年八月であるから、三十一年ぶりである。九州へ何度も行き、ソ連、中近東など、外国へも行っているのに、なぜ、江田島を訪れなかったのか。理由は簡単である。私が捕虜になって、アメリカの収容所から帰って来たからである。

江田島の表栈橋は、戦功に輝く凱旋の勇士か、それでなければ、勇敢な戦死をとげた卒業生の遺骨しか受け入れない……。これが海軍兵学校三カ年半の教育の間に、私の脳裡にしみついた思考法である。

江田島の旧教育参考館には、戦死者の姓名を刻んだ大理石の名牌めいはいが並んでいる。そのなかには、

二百人に及ぶ私の同期生の名前がある。私にはその名牌と語る勇氣がない。

今回、島を訪れたのは、私の兵学校生活を描いた小説が映画化されるので、そのロケを見に来るように誘われたからである。私には依然として戦友の名牌と対面する勇氣がない。しかし、私が戦友の青春時代をこくめいに描いたのは、私なりの一つの供養の方法である。死んだ者は生き返らない。生き残っている者に供養の義務があるとすれば、私が書き続ける戦争に関する文章は、戦死者をとむらう香烟の代わりと言ってもよい。

私は、自分の小説を演じる若い俳優諸君をながめながら、そこに私なりの葬送の儀礼が執行されているのを感じていた。

夕刻、私は参考館講堂の前に立った。厚い鉄の扉は閉じられていた。潮風が私の耳元をかすめ、戦死者の声を運んで来た。私はそのなかに多くの声を聞いた。一つの声はこう言っていた。――
生きろ！ 生きてくれ、おれたちの分まで生きてくれ――

頭をめぐらした私は、参考館のかたわらに、古びた小型潜航艇を発見した。黒塗りの船殻は錆び、司令塔は半ば崩れ、それを突き破るように、潜望鏡が屹立していた。

説明のボードを読むまでもなく、これが昭和十六年十二月八日、真珠湾の米艦隊を奇襲した特殊潜航艇であることが了解出来た。米軍が引き揚げ、日本に返還したのである。私はその錆び朽ちた船腹にさわってみた。だれが乗っていたものか……。私の頭のなかに、海軍少尉酒巻和男の姿があった。開戦当日、特殊潜航艇に乗り組み、ただ一人生存して、捕虜第一号となった。私の同期生である。

五隻の潜航艇に十人が乗り組み、九人が戦死して、九軍神という名で神に祀まつられた。ただ一人、生き残った酒巻は、生を選び、そして、生の重味に耐えたのである。

陽は江田島の対岸能美島の山なみに近づき、参考館の周辺に夕暗がしのびよっていた。

私はブラジルで自動車の会社を営んでいる酒巻のことを考えていた。あれから三十年が経過している。日本が太平洋戦争を始め、酒巻が真珠湾の湾口で、苦渋な戦いを経験してから、三十年の歳月が流れ過ぎようとしているのである。

二

太平洋戦争は、昭和十六年十二月八日午前一時三十分（日本時間）機動部隊からの攻撃機発進によって火ぶたを切られたと考えられている。ハワイ現地時間によれば、十二月七日午前六時である（以下現地時間を用いる）。しかし、それに先立つ午前三時四十二分、日米の戦いはすでに始まっていた。真珠湾の港外二マイル（海の一マイルは一八五二メートル）のところに、国籍不明の潜望鏡を発見したアメリカの掃海艇コンドルは、駆逐艦ウォードに連絡し、これを爆雷攻撃した。事実上、これが日米両軍接触の初めであるが、この報告が真珠湾のキンメル提督の司令部に着くまでに、日本軍はフォード島のアメリカ艦隊を爆撃しているので、米軍当局は、空襲をもって攻撃開始と考えていたのである。

掃海艇コンドルに発見された特殊潜航艇には二人の日本軍人が乗り組んでいた。艇長の海軍少

尉酒巻和男と、これを補佐する艇附の稲垣清一等兵曹である。

コンドルが酒巻の艇を発見したとき、酒巻の潜望鏡も、コンドルをレンズのなかにとらえていた。切り立ったオアフ島の崖の手前を、のんびりと哨戒する米の小艦を発見した酒巻は、なおも、真珠湾の湾口を探ろうとしていた。山本五十六連合艦隊司令長官からハワイ攻撃部隊に発信された命令は、

「ニイタカヤマノボレー二〇八」すなわち、日本時間十二月八日午前零時戦闘開始である。これはハワイ時間の七日午前四時半にあたる。酒巻の受けている指令は、開戦までに真珠湾口に潜入し、開戦と同時に敵の空母もしくは戦艦に九〇式四十五センチ魚雷を発射することになっている。開戦前に、真珠湾の港外にいるようでは、特殊潜航艇による攻撃はおぼつかない。三百五十機の攻撃隊が真珠湾を空襲した後では、米軍の警戒は嚴重となり、湾口突破の可能性は零に等しいからだ。

敵に発見されながらも、酒巻の艇は潜望鏡による真珠湾口の強行偵察を続行していた。開戦時間まで、あと一時間足らずしかない。それまでに湾口を発見して潜入しなければならない。東の空はかすかに白み、間もなく夜明けがやって来るのである。

「畜生、ジャイロさえ故障していなければな」

酒巻は、潜望鏡の把手を握りしめながら、舌打ちをした。方向を定めるジャイロコンパス（転輪羅針儀）は、母艦のイ号第二十四潜水艦をはなれる前から故障し、どうしても動かなかったのだ。

「艇長！何か見えますか。湾口はまだですか」

立っている酒巻の膝の位置にしゃがんでいる稲垣兵曹も心配そうだ。

「うむ、小さな船が見える、哨戒艇かな。あ、大きいのが来た」

酒巻の潜望鏡には、黒々とした駆逐艦ウオードの姿が映っていた。

「いかん、駆逐艦らしい。こちらへ来る。急速潜航！」

哨戒艇と駆逐艦がチカチカと発光信号で交信するのを見ると、酒巻は反射的に叫んだ。

「急速潜航！」

復誦した稲垣兵曹が水平舵の舵輪を回して、下げ舵をとった。長さ二十四メートル、重量四十

六トンの特殊潜航艇は、ガクンと急激な舵の利き方を示し、急角度で真珠湾沖の海底を目ざした。

酒巻は、潜望鏡のわきにある深度計を見守った。

十五、二十、二十五……

深度計の針が回ってゆく。針が三十を指したときだ。

ガガン!!

最初の衝撃が来た。艇全体が巨人の掌ではたかれた笹舟のように揺れた。酒巻は潜望鏡にしがみつき、稲垣は舵輪で胸を打ったらしく、うめいた。艇内灯が急に暗くなった。

「艇長、爆雷ですね」

「うむ、駆逐艦の攻撃だ、潜航を続けろ」

「はい、潜航を続けます」

これが、米軍の第一撃だとすると、太平洋戦争開始の第一弾は、米駆逐艦による爆雷攻撃だということになる。

深度五十メートルで、酒巻は「潜航止め」を命じた。普通の爆雷ならば、この深度でまず安全であるし、特潜（特殊潜航艇）の強度も、これ以上では船殻にひびが入るおそれがある。

米艦の爆雷攻撃は続いていた。

ズーン、ズーンという炸裂音が、海水を伝って、特潜のわき腹に、無気味な衝撃を与えた。「艇長、大丈夫でしょうか。敵がふえると浮上が困難になります。開戦時刻まであと四十分しかありません」

稲垣兵曹が、下から酒巻の顔をふり仰いだ。

「心配するな。まだ戦争は始まっとらん。敵はわが軍の企図に気づいていない。間もなくあきらめて、立ち去る」

酒巻は力強い声で言った。緊急非常のとき部下は必ず指揮官の顔を見る。そのときに決して弱音をはいてはいかん、と海軍兵学校で何度も教えられて来たのである。

しかし、彼にも自信はなかった。特潜の動力は二次電池による電動機であるが、長時間海中に停止していると、艇のツリム（釣り合い）を失して艇が傾き、二次電池のなかにある液体が混合し、硫酸ガスを発生することが多い。

「艇長、艇が左に傾いて来ました」

「うむ」

艇の傾きを直すためには、モーターを始動し、舵の利きに頼らねばならない。しかし、いま、モーターを回せば、獵犬のように海上をかき回っている敵駆逐艦の音響探知器に探知され、爆雷のねらい撃ちをされるおそれがある。——ここは『忍』の一字あるのみだ——酒巻は、傾いて来る体を、潜望鏡で支えながら、眼をつむった。

「艇長！　においせんか。硫酸ガスです」

稲垣兵曹に注意されるまでもなく、刺激性の強いガスが、鼻を衝き、眼頭にしみこんで来た。

——大体この艇は構造に無理がある。従って事故が多い。諸君は、新兵器の実験台として、身をもって構造の不備なる点をつきとめてもらいたい——

初めて特潜乗組を命じられ、呉の潜水学校に着任したときの訓示を酒巻は想いうかべていた。いま少して遭難するところだった岩佐隊長のことを彼は想起した。——おれもいまにあのような目にあうのだ。顔の皮膚が全部焦けただれて……。

酒巻は傾いてゆく艇のなかで眼をひらいた。艇内の灯火が吸い取られるように細り、回想が海面下五十メートルの闇をひたした。

三

昭和十五年八月、海軍兵学校を卒業した酒巻が、特型格納筒の要員を命じられたのは、昭和十

六年四月、海軍少尉任官と同時に。特型格納筒すなわち特潜は秘密保持のためこう呼ばれ（甲標的と呼ばれたこともある）、極秘裡に研究が進められていた。一般に、特潜による特別攻撃隊員は志願によると考えられているが、このときは海軍大臣の任命によるものであった。

攻撃隊は五隻編制で、隊長の岩佐直治大尉はすでに半年前から訓練に従事していた。他の艇長は、酒巻より一期上の古野繁実中尉、横山正治中尉、それに酒巻と同期の広尾彰少尉であった。

岩佐大尉は海兵六十五期生で、酒巻たち六十八期生からいえば、鬼よりこわい一号生徒だ。なかでも岩佐生徒は、剣道四段、全校剣道係主任で、色の浅黒い精悍な一号生徒であった。しかし、実際に生死を共にする特別攻撃隊員となってみると、緻密でよく後輩の面倒をみるすぐれた隊長であった。大きく鋭い眼が、笑うと、クリクリと愛嬌のある眼付にかわった。上州の生まれで、少量の酒が入ると詩吟や八木節などを歌って聞かせることがあった。

特潜講習員となった酒巻たちは、まず特殊潜航艇母艦千代田乗組を命じられ、呉海軍工廠に通うことになった。特潜こと特型格納筒は海軍工廠の魚雷実験部で製作されていた。

機密保持のため、作業員には、魚雷を格納する鋼鉄製の円筒だと説明されていた。そして、船殻すなわち胴体が完成すると、モーターと電池が設置され、隠密裡に司令塔と潜望鏡が取り付けられ、夜陰に乗じて、すぐ近くの呉海軍潜水学校の密閉された秘密機橋に運ばれた。ここで、訓練用の九〇式魚雷を積み、訓練のため佐田岬に近い愛媛県の三机基地（みつぐさ）に向うのである。

特潜の性能はモーターの出力六百馬力。全速十九ノット（三十五キロ）、半速十ノット、微速六ノット。航続力、全速で十六マイル、微速で八十マイル。内殻の直径は一・八五メートルで機器